

朝の礼拝

聖書 マルコによる福音書 4 章 35－41 節（新約聖書 67 頁）

さて、その日の夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。そこで、彼らは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。すると、激しい突風が起こり、波が舟の中まで入り込み、舟は水浸しになった。しかし、イエス自身は、艫の方で枕をして眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスを起こして、「先生、私たちが溺れ死んでも、かまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信仰がないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか」と互いに言った。

向こう岸へ

イエスが弟子たちに「向こう岸へ渡ろう」と言われました。ガリラヤ湖は琵琶湖の四分の一です。沖へ漕ぎ出しても向こう岸は見えます。それもイエス自らそう言いました。そしてイエスも弟子たちと共に舟に乗られました。ただ一つだけ不安なのは沖へ漕ぎ出たのが夕方だったことです。

闇夜と共に、湖面は突風でしけの海のように荒れ、舟は水浸しとなり、沈む寸前だったでしょう。主が共におられても旅は安全ではありません。むしろ試練は必ずやって来るのがわかります。さらに生命の危険が迫るのに、イエスは舟の後ろで眠ったままでした。

おそらく弟子たちは口々に「先生、私たちが溺れ死んでも、かまわないのですか」と叫び、寝ているイエスを必死に揺さぶったことでしょう。弟子たちの叫びは、ほとんど怒りにも似たものでしょう。恐怖におののく彼らの緊迫感が伝わってきます。

主の弟子の多くは漁師です。漁師は「板子一枚下は地獄」と言います。彼らはよく知っていました。でも主が「向こう岸へ渡ろう」と言われ、共に舟に乗られた意味を、彼らはわかりませんでした。わたしたちが願う前から、思いを超え、主は必要なものを備え、導き、守られているのです。

(しばらく黙祷しましょう)

慈しみ深い主よ、あなたの深い憐れみによって赦され、生かされている恵みを感謝します。あなたは一人ひとりの歩みのうちに「向こう岸へ渡ろう」と呼ばれています。しかしわたしたちも荒波に遭う時、あなたが寝ておられるようで恐れ不安になります。どうかあなたの言葉を信頼し、わたしたちを向こう岸へと導いてください。殊に今週 20 日、静岡大空襲から 80 年を迎えます。静岡英和も全焼しました。しかし世界は愚かにも今も争いを繰り返しています。どうかわたしたちを平和の器として用いてください。また今、病にある方々を覚えて祈ります。どうかひとときでも早く共に感謝を献げる日を迎えることができますように導いてください。今日一日も、すべてをあなたに委ね、喜びと感謝のうちに過ごさせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン